

輸入検疫で発見された主な重要害虫

学名：*Phenacoccus solenopsis* Tinsley

英名：solenopsis mealybug

(カメムシ目 コナカイガラムシ科)

本種はコナカイガラムシ科に属し、南北アメリカ、西アフリカ及びアジアの一部などに分布し、多種の農作物や園芸植物に寄生する我が国未発生の害虫である。本種はアメリカ大陸の原産と考えられるが、2005年頃からインド及びパキスタンへの侵入が確認され、両国の主要作物である綿花に深刻な被害を与えている（パキスタンのパンジャブ州では、2005年産の綿花が本種の寄生により14%減収となったとの報告がある）。さらに2009年にはオーストラリアへの侵入も確認され、綿花への被害拡大が懸念されている。我が国の輸入植物検査では、タイ産オクラ等の野菜類、台湾産オンシジューム等の切り花類及びメキシコ産ドラゴンフルーツ等の果実類から発見されており、特にタイ産オクラからは頻繁に発見されている。

分布 中国、台湾、タイ、スリランカ、インド、パキスタン、イスラエル、西アフリカ、北米～南米、オーストラリア、ニューカレドニア
寄主 広食性。53科154種の植物に対して寄生することが確認されている。寄主植物は雑草から作物まで広範囲にわたるため、本種の日本への定着の可能性は非常に高いと考えられる。

形態 雌成虫は翅を欠き、体形は楕円形。体長は通常3～4.2mm程度であり、大きい個体では5mmを超える。背面に白色のロウ質物を分泌し、全体としては白



く見えるが、白色ロウ質物は亜中央部で薄くなるため、ルーペ等で観察すると一見2対の黒斑があるように見え非常に特徴的である（写真）。ただし、これらの黒斑は2齢幼虫以降に見られ、1齢幼虫には見られない。なお、正確な種の同定を行うためには雌成虫のプレパラート標本作製し、生物顕微鏡で表皮にある分泌管の配置や数を確認する必要がある。

生態 雌成虫はワタ状のロウ質物の卵のう内に約150～600個（平均350個程度）産卵する。卵の多くは、雌成虫の体内でふ化するため、卵のう内の個体の多くはふ化幼虫（1齢幼虫）である。1齢幼虫は数日間卵のう内で過ごした後、摂食のために歩いて分散する。雌では2齢幼虫、3齢幼虫を経て成虫となる。雄では2齢幼虫の終わりに繭を作り、繭の中で前蛹、蛹を経て羽化し、1対の翅を持つ成虫となる。繁殖様式は、交尾後産卵する有性生殖と雌成虫が交尾せずに産卵する単為生殖の両方が知られている。本種の単為生殖個体群における1世代の発育期間は平均70日程度である。

被害 本種は寄主植物の葉、葉柄、茎、花芽及び果実に寄生する。吸汁により寄主植物を衰弱させる他、分泌した甘露（糖分を多く含む排泄物）が植物体表面のすす病菌を繁殖させ、寄主植物の光合成能力を低下させる。

防除 本種が綿花の重要害虫として知られるようになったのは、インド及びパキスタンへの侵入が確認された2005年以降であり、防除技術については現在開発途上の段階にある。化学的防除としては、有機リン系のプロフェノホス、クロルピリホスやカーバメート系のメソミルを有効成分とする殺虫剤が有効との報告がある。ただし、殺虫剤の過剰散布は薬剤抵抗性を発達させるおそれがあるため、他の防除方法も組み合わせる必要性が指摘されている。生物的防除としては、寄生蜂や捕食性のテントウムシが有望であると報告されている。その他の対策として、休耕中のほ場及びその近辺に生えている雑草の除去や農機具の適切な清掃等により、本虫の越冬・分散の阻止を図ることも有効である。